

バウムテストの教示における課題

小 海 宏 之

Koch (1949/1954/1957) によるバウムテストは、臨床現場でよく使用される有用な人格検査である。しかし、バウムテストの教示として、わが国ではさまざまな方法が行われており、適切な解釈を導くためには大きな問題を含んでいる。そこで、本研究では、バウムテストの教示として、とくにわが国ではどうあるべきかについて提言を行うことを目的とする。本研究により、これまでのわが国におけるバウムテストの知見を最大限活かし、国吉 (1970) による「実のなる木を1本、かいてください」と教示するか、もしくは、とくに高齢者に対しては、高橋・高橋 (1986) の樹木画テストとしての教示である「木を1本、かいてください」と教示することに妥当性があろうと考えられ、さらに、バウムテストに取り組む構えを含めた教示内容も含めると、「できるだけ丁寧に (かいてください)」とそれぞれ挿入しても構わないとも考えられる。

キーワード：バウムテスト、教示、実のなる（果物の）木

The Baumtest by Koch (1949/1954/1957) is a clinically useful personality test. However, in Japan, different instructions are used in administering the test, which is problematic for interpretation. Therefore, this research aims to formulate recommended instructions for administering the Baumtest in Japan. According to this research, the instruction of the Baumtest in Japan should be, "Please draw a fruit tree" by Kuniyoshi (1970), or "Please draw a tree" by Takahashi and Takahashi (1986) when you carry out this test to elderly. Additionally, when considering the inclusion of attitudes when administering the Baumtest, it is recommended to use the directive of, "as carefully as possible".

Key words : Baumtest, instruction, Obstbaum

I. はじめに

わが国の臨床現場でよく使用される人格検査としてバウムテスト (Baumtest) があり、その原著者であるスイスの Koch は、1949年にドイツ語による原著を著し、1952年に英語版、1954年にドイツ語による原著第2版、1957年にドイツ語による原著第3版を公刊しており、1958年に Koch は病没しているため、第4版以降は第3版の重版である。

ところで、心理テストであるためには、刺激に対する反応を調査する必要があるため、その際、バウムテストのような描画テストの場合、刺激としてどのような教示を行うのか、そして、反応として

健常群や臨床群ではどのような描画特徴があるのかを明確にすることによって、その解釈の妥当性が確保されるわけである。

しかし、わが国におけるバウムテストの教示では、さまざまな方法が行われており、適切な解釈を導くためには大きな問題を含んでいる。

そこで、本研究では、バウムテストの教示として、わが国ではどうあるべきか、さらにバウムテストにおける今後の課題について検討することにより、今後のバウムテストの発展に寄与するための提言を行うことを目的とする。

II. Koch の原著での教示

バウムテストの教示の発案に関する経緯は、Koch (1952/1970) に詳述されており、その部分を引用すると、「もともと、このテストの実施法は、ただ単に“木をかきなさい”というだけであった。だから木をかく人は、いろいろな形の木をかいて自由に自分を表現した。葉のついた木、松の木、空間的に比較的広がりをもった果物の木、天に向かって伸びているポプラの木など、全くいろいろであった。こうして得られた多様さは、もちろん、心理学的に興味のないことではなかったが、この表現形式についての組織的な考察と調査を行うことが困難になった。これは、ある程度、筆跡学において正規の書式を定めていることに相当する。最初、私たちは、テストをするに際して用いる教示を3つ考えた。それは、(1)“葉のついた木をかきなさい”、(2)“木をかきなさい。ただし松の木でないこと”、(3)“実のなる木をかきなさい”である。こうした方法を多数試みた結果、私たちは第三の教示を用いることに意見が一致した。この教示を用いれば、実をかくように特別に誘導されるわけではないが、同時に、実をかくことを禁止されることもないことがわかった。被験者が、与えられたスペースのなかにどのような形の木をかこうと、それは全く自由である」とされている。この採択された第三の教示である *Obstbaum* を日本語訳としてどう考えるべきかについては後述するが、林ら (1970) は、「実のなる木」と訳出している。

なお、同じバウムテストの教示の発案に関する経緯が、岸本 (2015) により詳述されており、その

部分を引用すると、ドイツ語の原著「初版 (Koch, 1949) には、最初は「木を描いてください」というだけであったが、この教示では表現があまりに多様になって「方法論として磨きをかけること」も「表現の学問的調査を体系的に行うこと」も難しいと考え、次の3つの教示を検討した。a: 広葉樹 (注: 「広葉樹」の原語は *Laubbaum* (*Laub* (葉) + *Baum* (木)) であり、発達研究における子ども向けの教示として用いられたことを考えると「葉っぱのある木」と訳す方がいいかもしれない) を描いてください。b: 1本の木を描いてください。ただしモミの木以外の木でお願いします。c: 1本の果物の木を描いてください。そして、「非常にたくさんの実験を行った後で、最後の「1本の果物の木を描いてください」という教示に落ち着いた」とコッホは述べている」

また、中島 (2002) によると Koch の原著における教示は、表1に示すとおりである。ドイツ語による原著初版と原著第2版は、「*Zeichnen Sie bitte einen Obstbaum, so gut Sie es können. Sie dürfen das ganze Blatt benutzen.*」であったが、ドイツ語による原著第3版は、「*Sie dürfen das ganze Blatt benutzen.*」の部分が削除され、「*Zeichnen Sie bitte einen Obstbaum, so gut Sie es können.*」とされている。

III. バウムテストのわが国での教示

わが国における Koch によるバウムテストの訳書としての成書は、現在、2冊ある。

まず1冊目は、Koch (1952) の英語版の訳書として、林ら (1970) による「Please draw a fruit

表1. Koch の原著におけるバウムテストの教示 (中島, 2002。一部改変)

Der Baum-Test (1949) (初版)	<i>Zeichnen Sie bitte einen Obstbaum, so gut Sie es können. Sie dürfen das ganze Blatt benutzen.</i>
The Tree Test (1952) (英語版)	<i>Please draw a fruit tree, as well as you can. You may use the whole sheet.</i>
Der Baumtest (1954) (第2版)	ドイツ語初版と同じ
Der Baumtest (1957) (第3版)	<i>Zeichnen Sie bitte einen Obstbaum, so gut Sie es können.</i>

tree, as well as you can. You may use the whole sheet.」を、「実のなる木をできるだけ上手にかいてください。画用紙は全部使ってよろしい」と訳出された教示法が長年、臨床現場で活用されてきた。もしくは、同成書に掲載されている国吉(1970)による「補遺：日本におけるバウム・テストの研究」における「実のなる木を1本かいて下さい」という、ドイツ語の原著第3版での教示のように後半の「画用紙は全部使ってよろしい」の部分を省いた教示方法がしばしば活用されてきた。

次の2冊目は、Koch(1957)のドイツ語の原著第3版の訳書として、新たに岸本ら(2010)により出版され、「Zeichnen Sie bitte einen Obstbaum, so gut Sie es können.」を、「果物の木を[1本]、できるだけ上手に描いてください」と訳出されている。なお、岸本(2010)によると、これまでの林ら(1970)の訳書は、誤訳の多い英語版からの重訳であるため、誤訳が二重に含まれており、これを参照して所見を作ることは危険であること、またその後改訂されて分量が約3倍になった第3版のテキスト(Koch, 1957)はこれまで紹介されてこなかったことを指摘しており、今後、わが国におけるバウムテストの教示としては、このドイツ語の原著第3版の訳出に基づいた方法で行われると考えられる。

IV. 樹木画テストでの教示

Buck(1948, 1949)によるH-T-P Techniqueの方法、およびMachover(1949)の人物画テストの方法、すなわち人物の描画において、被検者が描いた人物と反対の性の人物も描かせる方法を取り入れ、高橋(1967)は、HTP(House-Tree-Person)テストとして4枚法を提唱している。また、実施法としての教示は、「今から絵を描いてもらいます。これは別に絵のじょうず、へたを調べる検査ではありませんから、楽な気持ちでかいてください。しかし、いいかげんにかかないで、できるだけじょうずにかくようにしてください。なお、これは写生をするものではありません。自分の思ったとおりにかけばよいのです」と説明を与えた後、「では、

この紙に家をかいてください」「こんどは木を1本かいてください」「こんどは人間をひとりかいてください。顔だけでなくぜんたいをかいてください」と順に指示する。さらに、人物画の性別を尋ねて記録しておき、次にその反対の性の人間をかくように指示するとなっている。

その後、高橋(1974)は、教示の一部を変更し、「今からあなたに絵を描いてもらいます。これは絵のじょうず、へたを調べるわけではありませんから、気楽な気持ちでかいてください。しかし、いいかげんにかかないで、できるだけいねいにかくようにしてください。なお、これは写生をするものではありません。自分の思ったとおりにかけばよいのです」と説明を与えた後、「では、この紙に家をかいてください」「こんどは木を1本かいてください」「こんどは人をひとりかいてください。顔だけでなく全身をかいてください」「では、今後は男の人(女の人)をひとりかいてください。やはり顔だけでなく、全身をかいてください」と教示することになっている。そして、この教示法は、高橋(2011)でも引き継がれ同様のものとなっている。

さらに、高橋・高橋(1986)は、HTPテストのうち樹木画のみを独立させた樹木画テストを提唱しており、これによると、わが国ではKochのバウムテストがよく行われていて、「実のなる木」を描くように教示されているが、この教示を取り入れていない理由として以下をあげている。「①投影法として樹木画を用いる場合、特定の木を指定しないで、できるだけ被検者が自由に描けるようにすることが望ましいし、果実についてことさらに指示しない時に、被検者が自発的に果実を描くことがあれば、それに意味があると思われるからである。また、②日本とヨーロッパの風土や文化の違いから、日本語としての「果樹」や「実のなる木」が有するイメージと、ヨーロッパの人々が「Obstbaum(fruit tree)」に対して有するイメージが異なると考えられるからでもある」としている。そして、この教示法は、高橋・高橋(2010)でも引き継がれ同様のものとなっている。なお、高橋・高橋(1986)による樹木画テストの方法で、「実のなる木」を描くように教示していないのに、カキやりんごなどの「果実」を描く者は、①創造的活動が実を結ぶ

であろう自信や、②何かを達成したという肯定的感情や自己の誇示を表す場合もあるし、描画の他のサインとの関係から見て、③幼児的な依存欲求や、④感情的に拒否された経験を表すこともある。また、女性の被検者では果実が子どもを象徴し、⑤子どもを持ちたいという欲求や子どもへの関心を表すことも多いとされている。

V. 考察：バウムテストの教示として、とくにわが国ではどうあるべきかについての一提言

半側空間無視 (unilateral spatial neglect: USN) は、Brain (1941) が右半球損傷による症状を agnosia for the left half of the space と報告して以来、脳卒中や頭部外傷などによる右半球頭頂葉周辺領域の損傷に伴ってよくみられることが報告され、Diller & Gordon (1981) によると、右半球の脳卒中患者では約 40% の者が左半側空間無視 (left USN) の症状を示すと報告されている。一方、左半球頭頂葉周辺領域の損傷患者における右半側空間無視 (right USN) の症状を呈する頻度は低く、症状も軽度であることが多い。この USN に左右差を認める現象については、Heilman & Van den Abell (1980) によると、右半球は両側視野に注意を向けるが、左半球は対側視野に注意をより強く向けるためではないかと指摘されている。また、USN は視床や大脳基底核などの病巣でも出現することが知られているが (久保, 1980; Watson & Heilman, 1979)、梨谷ら (2002) は、右被殻出血症例に図形模写試験だけではなくバウムテストも適用し、左 USN の症状をいずれでも呈し、とくにバウムテストにおける障害からは、内的な記憶情報からのイメージの描出にも障害がある可能性を指摘しており (図 1 参照)、小海 (2019a) は、USN の出現機序や左右差の問題も含め、今後の検討がさらに必要となることを指摘している。

そこで、著者自身は、バウムテストを実施する際は、高橋・高橋 (1986) による樹木画テストの方法をとり、アルツハイマー型認知症者の樹木画テストにおける描画特徴の検討などを行ってきたが (小海ら, 2003)、その後、臨床現場では神

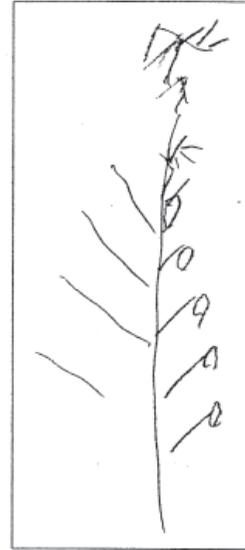


図 1. 右被殻出血症例のバウムテスト結果 (出典：梨谷ら, 2002。一部改変)

経発達障害、神経認知障害、高次脳機能障害などの患者の心理アセスメントを行う機会が多かったので、この USN の検出も同時に打診できる可能性から、高橋・高橋 (1986) による樹木画テストに取り組み構えを含めた教示内容および国吉 (1970) の教示方法を再検討し、最大公約数的な教示方法として、「実のなる木を 1 本、できるだけ丁寧に描いてください」との教示に変えて実施していた。

そのような経過において、図 2 に示す症例 A は、53 歳時に記憶の障害を主とし認知機能障害が多岐にわたる軽度認知障害 (amnesic Mild Cognitive Impairment multiple domain: amnesic MCI multiple domain) と診断され、塩酸ドネペジルによる薬物療法が開始され、3 回目の 54 歳時には AD に移行し、介護者である子どもの居住している近隣の病院に入院する 57 歳時の 6 回目までを Mini-Mental State Examination (MMSE)、Alzheimer's Disease Assessment Scale-Japanese cognitive part (ADAS-Jcog.)、コース立方体テスト、バウムテストで経過を追った結果である。半年後 (2 回目) のバウムテストでは枯れ木となり、うつ病を合併していたため、短期間ではあるが、選択的セロトニン再取り込み阻害剤 (selective serotonin reuptake inhibitors: SSRIs) の追加投与も受けた。1 年半後

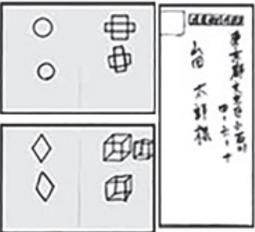
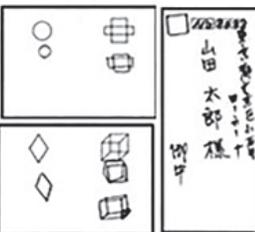
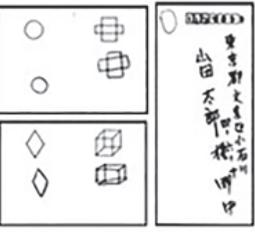
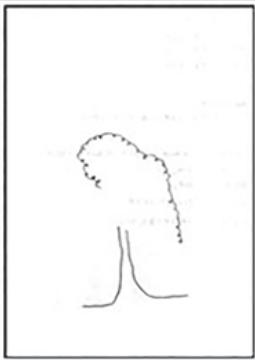
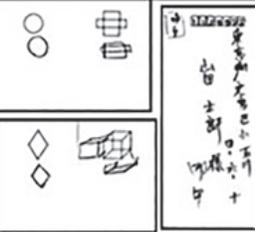
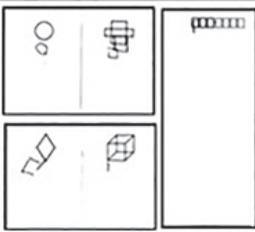
検査回数	1回目	2回目	3回目
検査時年齢	53歳	54歳	54歳
MMSE	28	28	28
ADAS-Jcog.	10.0	15.4	20.4
Kohs IQ	75	74	56
Baumtest			
ADAS-Jcog.			
検査回数	4回目	5回目	6回目
検査時年齢	56歳	56歳	57歳
MMSE	26	24	16
ADAS-Jcog.	19.3	25.4	31.0
Kohs IQ	45	38	33未満
Baumtest			
ADAS-Jcog.			

図2. 症例 A : 53 歳、女性。右手利き。#amnesic MCI から probable AD に移行 (出典 : 小海, 2012。一部改変)

(3回目)のバウムテストでは、うつ病が改善し、自信を取り戻していることがうかがわれる。ただし、ADAS-Jcog.の失点は20.4、Kohs Intelligence Quotient (IQ) 56と視空間認知構成や聴覚言語記銘の機能が低下し、生活障害も認められるようになり、probable ADへの移行と診断されている。2年半後(4回目)までは、塩酸ドネペジルの効果もあつてか、ADAS-Jcog.、Kohs IQにおける認知機能は少し低下した段階で維持され、大きな推移はみられない。4回目のバウムテストでは、1回目同様の大きなサイズのものとなり、情動機能も安定しながらエネルギー水準が改善してきていることが見て取れる。3年後(5回目)では、MMSEでも見当識やワーキングメモリの低下を認めるようになり、ADAS-Jcog.における失点やKohs IQの低下で示される、聴覚言語記銘力および保持・再生、視空間認知構成、遂行機能などに障害を認めるようになった。しかし、バウムテストは初めて実を描画し、情動機能は安定していることがうかがわれるものとなる。3年半後(6回目)は、MMSE、ADAS-Jcog.、Kohs IQのいずれでも顕著な認知機能の低下の進行を認めるようになり、生活障害も著しく認めるようになり、その後、入院に至っている。バウムテストは、サイズが再度、小さくなり、エネルギー水準の低下や全体の印象からは空虚感がうかがわれ、樹冠の歪みとしての視空間認知機能のさらなる低下や情動機能の不安定化がうかがわれるものとなる(小海, 2012)。本症例Aに適用した臨床心理・神経心理テストの結果からは、まず、MMSEの認知障害のカットオフポイントは23/24点と言われているから、本症例では5回目ですと24点のボーダーとなり、6回目16点とカットオフポイントを下回っていることになる。つまり、MMSEのような簡易なスクリーニング検査では、やはり認知症の検出が難しいため、ADAS-Jcog.などによる精査を受けることの重要性を示唆すると考えられる。また、ヒトが生活するうえで重要な認知機能と同様に、情動機能を縦断的に把握するためにもバウムテストは重要な示唆を与えてくれるものとも考えられる(小海, 2019b)。

ところで、小林(1990)は、「実のなる木を1本かいてください」との教示による生理的加齢とア

ルツハイマー型認知症にみられるバウムテストの変化について、とくに生理的加齢にみられる変化が強調されて出現する項目は、「樹木の縮小化」「地平の消失」「一線幹の増加(二線幹の減少)」「枝立体描写の減少」「枝の全一線枝化」「幹上を冠がおおう木の減少」であったと報告している。著者も臨床経験則的には、健常の高齢者のバウムテストはカキの木の出現が多いのと、冠型樹冠が出現しにくい印象を持っていたので、逆にKoch(1952/1970)および高橋・高橋(1986)による解釈は元の健常者データに高齢者を含まないため、そのまま適用できない可能性もあると考えられるし、とくに一線幹、一線枝、樹冠なしに関しては、木の主要な最小要素を描画するとこの様な特徴になるとも考えられる。

また、福住ら(2011)は、対象として65歳以上の高齢者214名(男性108名、女性106名、平均年齢 73.43 ± 5.89 歳)を無作為に2群に振り分け、教示を各群に即して、「1本の実のなる木を描いてください(実のなる木群)」および「1本の木を描いてください(木群)」で実施し、描画に求められる樹種や丁寧さの程度などについて対象者から質問を受けた際には、「自由に描いて結構です」と回答し、MMSEが29点以上の者111名、実のなる木群50名(男性24名、女性26名、平均年齢 73.44 ± 4.77 歳)、木群61名(男性28名、女性33名、平均年齢 72.70 ± 7.33)を分析対象とし、教示の異なる2群における冠型樹冠の出現率などを検証している。教示別の冠型樹冠の出現率は、表2に示すとおりであり、「1本の実のなる木を描いてください(実のなる木群)」で50名中の2名(4%)、「1本の木を描いてください(木群)」で61名中の27名(44%)となり、冠型樹冠を描いた者が2名のみのため統計解析は行えないが、教示を「1本の実のなる木を描いてください(実のなる木群)」とするより、冠型樹冠の出現率が高いことが明らかとなったと報告している(福住ら, 2011)。また、教示別の描かれた樹種例は、表3に示すとおりであり、教示を「1本の実のなる木を描いてください(実のなる木群)」で樹種として多い方から、「カキ」が50名中の15名(30%)、「ミカン」が50名

表2. 教示別の冠型樹冠の出現数 (出典: 福住ら, 2011。一部改変)

	樹冠あり	樹冠なし	計	樹冠出現率
実のなる木群	2	48	50	0.04
調整済み残差	-4.8	4.8		
木群	27	34	61	0.44
調整済み残差	4.8	-4.8		
計	29	82	111	0.26

表3. 教示別の描かれた樹種例 (出典: 福住ら, 2011。一部改変)

実のなる木群			木群		
カキ (15)	ミカン (9)	ウメ (8)	マツ (7)	スギ (7)	サクラ (4)
リンゴ (8)	レモン (2)	ブドウ (2)	ケヤキ (3)	カキ (3)	ウメ (2)
サクランボ (2)			クスノキ (2)		
樹種の特定されない木 (2)			樹種の特定されない木 (12)		

注: 表中 () 内は度数を示す。樹種の記載は度数2以上のもののみを示した。

中の9名(18%)、「ウメ」と「リンゴ」が50名中の8名(16%)であり、「1本の木を描いてください(木群)」で樹種として多い方から、「マツ」と「スギ」が61名中7名(11.4%)、「サクラ」が4名(6.6%)、「ケヤキ」と「カキ」が3名(4.9%)であり、「1本の実のなる木を描いてください(実のなる木群)」と教示した際に偏って出現率の高かった「カキ」が、「1本の木を描いてください(木群)」と教示した場合、明らかに減少したと報告している(福住ら, 2011)。さらに、カキの木を描いた対象者は「1本の実のなる木を描いてください(実のなる木群)」で15名(30%)、「1本の木を描いてください(木群)」で3名(4.9%)で、これら18名のなかで冠型樹冠を描いた対象者はいなかったと報告し、高齢者の描画では一般的に冠型樹冠が減少するという現象は、教示を「1本の木」とすることで若年者との違いが緩和され、冠型樹冠を年齢に関わらない要素として解釈可能であることを示唆すると指摘している(福住ら, 2011)。なお、中島(2006)によると、「実のなる木を1本、かいてください」(国吉, 1970)の教示による樹種としての「りんご」の出現率は、幼児群23.9%、小学生群54.4%、看護学生群57.9%、医療系学生群40.8%であり、他の樹種に比べ高い出現率であったと報告されている。また、「カキ」の出現率は、幼児群7.9%、小学生群10.0%、看護学生群1.7%、医療系学生群12.5%であったと報告されており、同教示

による高齢者の「カキ」の出現率(30%)は幼児期、学童期、青年期の者と比べて、やはり高い出現率であることがわかる。

さらに、石井・藤元(2017)は、対象として東京都内の私立大学に勤務する教職員72名(男性29名、女性43名)を機縁法により抽出し、「実のなる木を1本描いて下さい」と教示するKoch法群(38名、男性13名、女性25名、平均年齢41.0±10.3歳)、および「木を1本描いて下さい」と教示するBuck法群(34名、男性16名、女性18名、平均年齢38.1±8.4歳)にテストを行い、教示法の違いによる実の出現率を検証している。その結果、両群間における実の出現率は、Koch法群33名(87%)、Buck法群6名(18%)で、実の出現率に有意差が認められた($p<0.001$)と報告している。そして、1ヶ月後、1回目にKoch法で実を描いた7名およびBuck法で実を描かなかった8名に対して、初回とは逆の教示条件下でテストを行った結果、1回目にKoch法で実を描いた群はBuck法で1名も実を描かず、逆に1回目にBuck法で実を描かなかった群はKoch法で全員が実を描いたと報告しており、教示において「実」などいわゆるartifactになり得る変数は可能な限り統制する必要があると指摘している。

ところで、岸本ら(2010)による、「果物の木を1本、できるだけ上手に描いてください」との教示で実施したバウムテストを次に示す。図3に示す

症例 B は、54 歳の女性で、若年性アルツハイマー病による認知症と診断されており、バウムテストでは、ぶどうの果実のみを描画しており、聴覚言語記憶力の低下による初頭効果として、「果物」の教示しかインプットできなかつた可能性が示唆されるものとなっている。図 4 に示す事例 C は、20 歳の男性で、健常大学生であり、YG 性格検査は典型 D 型 (director type: 安定積極型) と判定されており、バウムテストでは、果実としてぶどう、リンゴ、バナナ、みかんを混在して描画しており、教示の「果物」の刺激語に過剰に反応している可能性が示唆される。図 5 に示す事例 D は、20 歳の男性で、健常大学生であり、YG 性格検査は準型 D' 型 (director type: 安定積極型) と判定されており、バウムテストでは、果実として大きなオレンジと若干の枝と葉を描画しており、事例 C 同様に教示の「果物」の刺激語に過剰に反応している可能性が示唆される。さらに、図 6 に示す事例 E は、20 歳の女性で、健常大学生であり、YG 性格検査は準型 E' 型 (eccentric type: 不安定消極型) と判定されており、バウムテストでは、果実として落

下した大きなリングを強調して描画しており、落下した実は、分離 (Lösung) の指標といわれているが (岸本ら, 2010)、事例 B および C 同様に教示の「果物」の刺激語に過剰に反応している可能性が示唆される。

なお、中井 (2000) は、心的外傷患者には主として誘発線法を使用し、他の方法、たとえば樹木画では、「まだ実りのない」時期に「実」の画を求めるのは過酷であつて治療的でないとし、「実」を省き、また彩色を求める方法をとつていている。また、岸本 (2015) は、山中 (1973) に倣つて「実のなる木を描いてください」という教示を使つてきた。そして、「実のなる木を描いてください」と頼むと、「実ですか!」と、「実」という言葉に反応されたり驚かれたりして、沈んだ心を少し動かしてくれるほどよい刺激となることもしばしば経験してきたので、好んで「実のなる木を描いてください」という教示を用いてきたと述べ、さらに、描き手の心性を考慮に入れながら、自分にじっくりくる教示を選ばよという意見をもつていているが、いずれの場合も、とくに「実」の解釈



図 3. 症例 B: 54 歳、女性。# 若年性アルツハイマー病による認知症

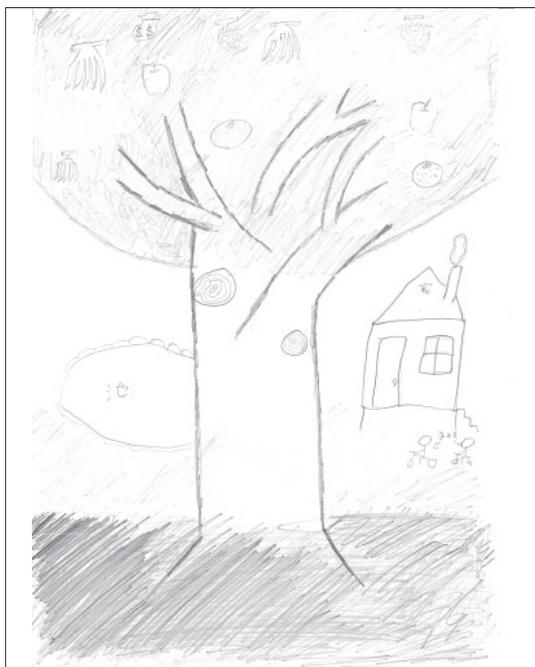


図 4. 事例 C: 20 歳、男性。大学生。

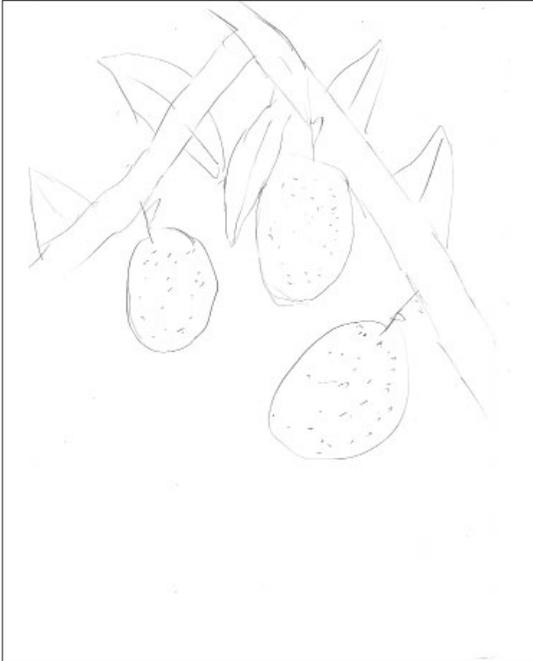


図5. 事例D：20歳、男性。大学生。

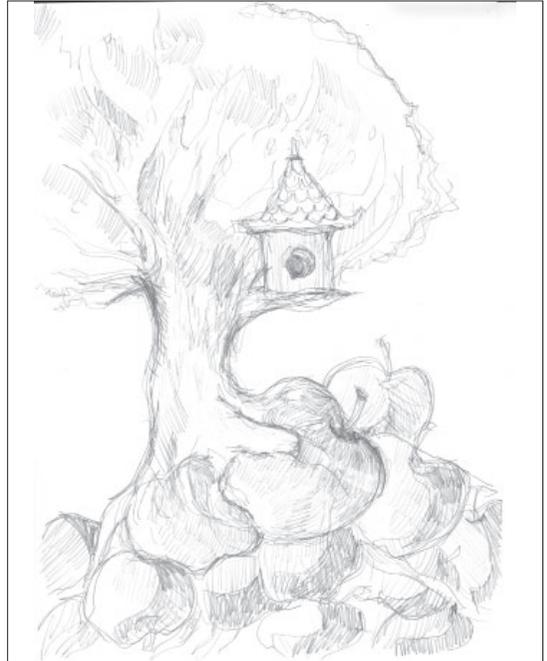


図6. 事例E：20歳、女性。大学生。

にあたっては、どのような教示がなされたかを踏まえて解釈すべきであることは強調しておきたいとも述べており、岸本ら（2010）による「果物の木を〔1本〕、できるだけ上手に描いてください」との教示を使用していないことがうかがわれる。

以上の知見などを俯瞰すると、これまでのわが国におけるバウムテストの知見を最大限活かし、国吉（1970）による「実のなる木を1本、かいてください」と教示するか、もしくは、とくに高齢者に対しては、高橋・高橋（1986）の樹木画テストとしての教示である「木を1本、かいてください」と教示することに妥当性があると考えられ、さらに、バウムテストに取り組む構えを含めた教示内容も含めると、「できるだけ丁寧に（かいてください）」とそれぞれ挿入しても構わないとも考えられる。また、わが国における大きな社会問題となっている認知症高齢者の急増を考えると、とくに高齢者の健常群および各臨床群のバウムテストにおける基礎データを集積することが今後の課題であろうと考えられる。

VI. おわりに

本研究では、バウムテストの教示として、とくにわが国ではどうあるべきか、さらにバウムテストにおける今後の課題について検討した。いずれにせよ、臨床現場でバウムテストを活用する際には、どのような教示法で実施したのか明確にしたうえで、解釈に活かすことが大切となろう。

注：倫理的配慮

本論文の事例提示については書面にて研究の主旨説明を行い、事例提示の許諾について承諾を得た。また、本論文の執筆にあたっては、個人の特定に繋がらないよう必要最小限の情報記載に留めるなど配慮した。

文献

- 1) Brain WR: Visual disorientation with special reference to lesions of the right cerebral hemisphere. *Brain*, 64, 244-272, 1941
- 2) Buck JN: The H-T-P technique: a qualitative and quantitative scoring manual. *Journal of Clinical*

- Psychology, 4, 317-396, 1948
- 3) Buck JN: The H-T-P technique: a qualitative and quantitative manual. *Journal of Clinical Psychology*, 5, 37-74, 1949
 - 4) Diller L, Gordon WA: Interventions for cognitive deficits in brain-injured adults. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 49, 822-834, 1981
 - 5) 福住昌美, 森川将行, 岡本 希, 車谷典男, 岸本 年史, 佐藤 豪: 高齢者を対象としたバウムテストにおける教示の比較. *心理学研究*, 82, 183-188, 2011
 - 6) Heilman KM, Van den Abell T: Right hemisphere dominance for attention: the mechanism underlying hemispheric asymmetries of inattention (neglect). *Neurology*, 30, 327-330, 1980
 - 7) 石井雄吉, 藤元祥子: 樹木画テストにおける教示方法の違いが実の出現に及ぼす影響. *心理臨床学研究*, 35, 422-426, 2017
 - 8) 岸本寛史: 臨床にいきるバウム. *臨床心理学*, 10, 645-650, 2010
 - 9) 岸本寛史: バウムテスト入門: 臨床に活かす「木の絵」の読み方. 誠信書房, 2015
 - 10) 小林敏子: バウムテストにみる加齢の研究: 生理的加齢とアルツハイマー型痴呆にみられる樹木画の変化の検討. *精神神経学雑誌*, 92, 22-58, 1990
 - 11) 小海宏之: バウムテストと文章完成法を用いる場合: 認知症者の投影法検査. 小海宏之, 若松直樹 (編) 高齢者こころのケアの実践: 上巻 認知症ケアのための心理アセスメント. 創元社, 2012. pp128-134.
 - 12) 小海宏之: 神経心理学的アセスメント・ハンドブック: 第2版. 金剛出版, 2019a
 - 13) 小海宏之: 「認知症ケアのための家族支援」について. *花園大学心理カウンセリングセンター研究紀要*, 13, 13-20, 2019b
 - 14) 小海宏之, 東 真一郎, 朝比奈恭子, 岡村香織, 首藤 賢, 川端康雄, 近藤元治, 津田清重, 寺嶋繁典: アルツハイマー型痴呆老人の樹木画テストにおける描画特徴の検討: 数量化理論による分析. *藍野学院紀要*, 16, 33-38, 2003
 - 15) Koch K: *Der Baum-Test: der baumzeichen-versuch als psychodiagnostisches hilfsmittel*. Bern: Verlag Hans Huber, 1949
 - 16) Koch C: *The Tree Test: The Tree-Drawing Test as an aid in psychodiagnosis*. Bern: Hans Huber, 1952 [林 勝造, 国吉政一, 一谷 彊 (訳): バウム・テスト: 樹木画による人格診断法. 日本文化科学社, 1970]
 - 17) Koch K: *Der Baumtest: der baumzeichenversuch als psychodiagnostisches hilfsmittel 2. umgearbeitete Auflage*. Bern: Verlag Hans Huber, 1954
 - 18) Koch K: *Der Baumtest: der baumzeichenversuch als psychodiagnostisches hilfsmittel 3. Auflage*. Bern: Verlag Hans Huber, 1957 [岸本寛史, 中島ナオミ, 宮崎忠男 (訳) バウムテスト [第3版]: 心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究. 誠信書房, 2010]
 - 19) 久保浩一: 半側空間失認. *神経進歩*, 24, 598-609, 1980
 - 20) 国吉政一: 補遺: 日本におけるバウム・テストの研究. 林勝造, 国吉政一, 一谷 彊 (訳): バウム・テスト: 樹木画による人格診断法. 日本文化科学社, 1970, pp117-150.
 - 21) Machover K: *Personality Projection in the Drawing of Human Figure*. Springfield, Ill: Charles C. Thomas, 1949
 - 22) 中井久夫: 特別講演「トラウマとその治療経験」. 日本臨床心理士会 被害者支援専門委員会 (編): 第1回 被害者支援研修会. 日本臨床心理士会, 2000. pp7-38.
 - 23) 中島ナオミ: わが国におけるバウムテストの教示. *臨床描画研究*, 17, 177-189, 2002
 - 24) 中島ナオミ: コッホのバウムテストに関する基礎研究: 樹種の分類と大阪地方における分布. *関西女子短期大学紀要*, 16, 1-8, 2006
 - 25) 梨谷竜也, 中野俊明, 宇野淳二, 馬場武彦, 西尾俊嗣: 右被殻出血により半側空間無視を呈した1例. *神経内科*, 57, 521-525, 2002
 - 26) 高橋雅春: 描画テスト診断法: HTP テスト. 文教書院, 1967
 - 27) 高橋雅春: 描画テスト入門: HTP テスト. 文教書院, 1974
 - 28) 高橋雅春, 高橋依子: 樹木画テスト. 文教書院, 1986
 - 29) 高橋雅春, 高橋依子: 樹木画テスト. 北大路書房, 2010
 - 30) 高橋依子: 描画テスト. 北大路書房, 2011
 - 31) Watson RT, Heilman KM: Thalamic neglect. *Neurology*, 29, 690-694, 1979
 - 32) 山中康裕: 双生児による基礎研究. 林勝造, 一谷 彊 (編): バウム・テストの臨床的研究. 日本文化科学社, 1973, pp1-26.